連載：現代管情報シリーズ

ロシア製

Mullard KT-88復刻版

（後編）

都来往人

ロシア：Reflector工場製KT88の変遷について

ロシア製のKT88系にはCロゴSvetlanaブランドを展開するSvetlana工場製品（SV-KT88）と，それとライバル関係にあるReflector工場製品（米国：New Sensor社傘下）の2系統があります．そして，Reflector工場製KT88系の原点は1990年代後半に開発されたSovtek-6550WEに遡り，さらにその原点は1992年にロシア製初の6550系として登場したSovtek-6550WAに辿り着きます．

GE製6550AとSylvania製6550の設計を折衷してデザインされたSovtek-6550WAはSvetlana工場で開発されました（2013年3月号参照）が，その後継品であるSovtek-6550WEは，Reflector工場製6550系の第1号です．ベースは先代（6550WA）同様にニッケル・メッキされたシェルと黒い底板の組み合わせですが，バルブは丈が5mm程長くて管頂部が扁平です．プレートは，3つ並んだ丸い放熱孔や接合面が幅広であることを含めた形状や寸法はSvetlana工場製の先代同様ですが，接合面の縁はY字状に切り開かれて銀色の裏地が覗いており，短い放熱翼としても機能するようになっている点が違います．そしてG1支柱にセットされた放熱板のうち，上端はL字状断面の板が互い違いに2枚セットされたKT66風，下端は2枚に分かれた山形で，先代とはデザインが異なります．円くて大きなマイカに爪は無く，上部マイカにのみ逆L字状の板バネが4本セットされているのは先代同様ですが，プレート固定部付近に刻まれた絶縁強化用スリットが極太な点が異なります．ゲッターは管頂部にのみ飛ばされています

このSovtek-6550WEの電極を3段のマイカと複数の柱で支持する構造に改めて，胴を切り詰めたST-16型バルブに封入する手法で開発されたのがSovtek-KT88です．

Reflector工場製のKT88系からは，Sovtek-KT88を皮切りに，2013年までに4種類のモデルが登場しています．

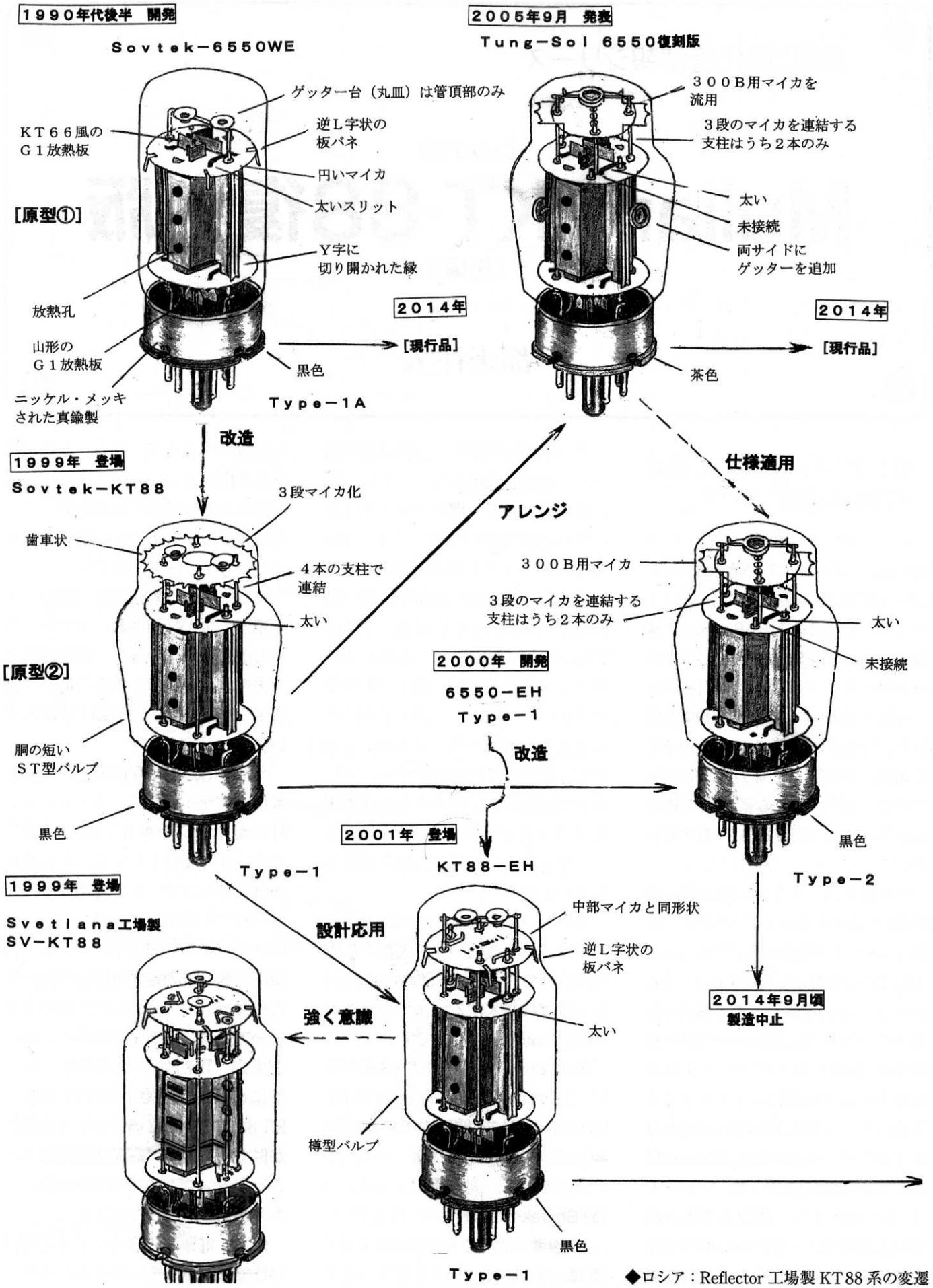
(1) Sovtek-KT88

1999年に開発されたSovtek-KT88は，“Coke-Bottle”と呼ばれるダルマ管スタイルで，プレートには放熱孔が開いていて，ゲッターは管頂部にのみ飛ばされているため，その姿はオリジナル6550に限りなく近いというユニークな球です．

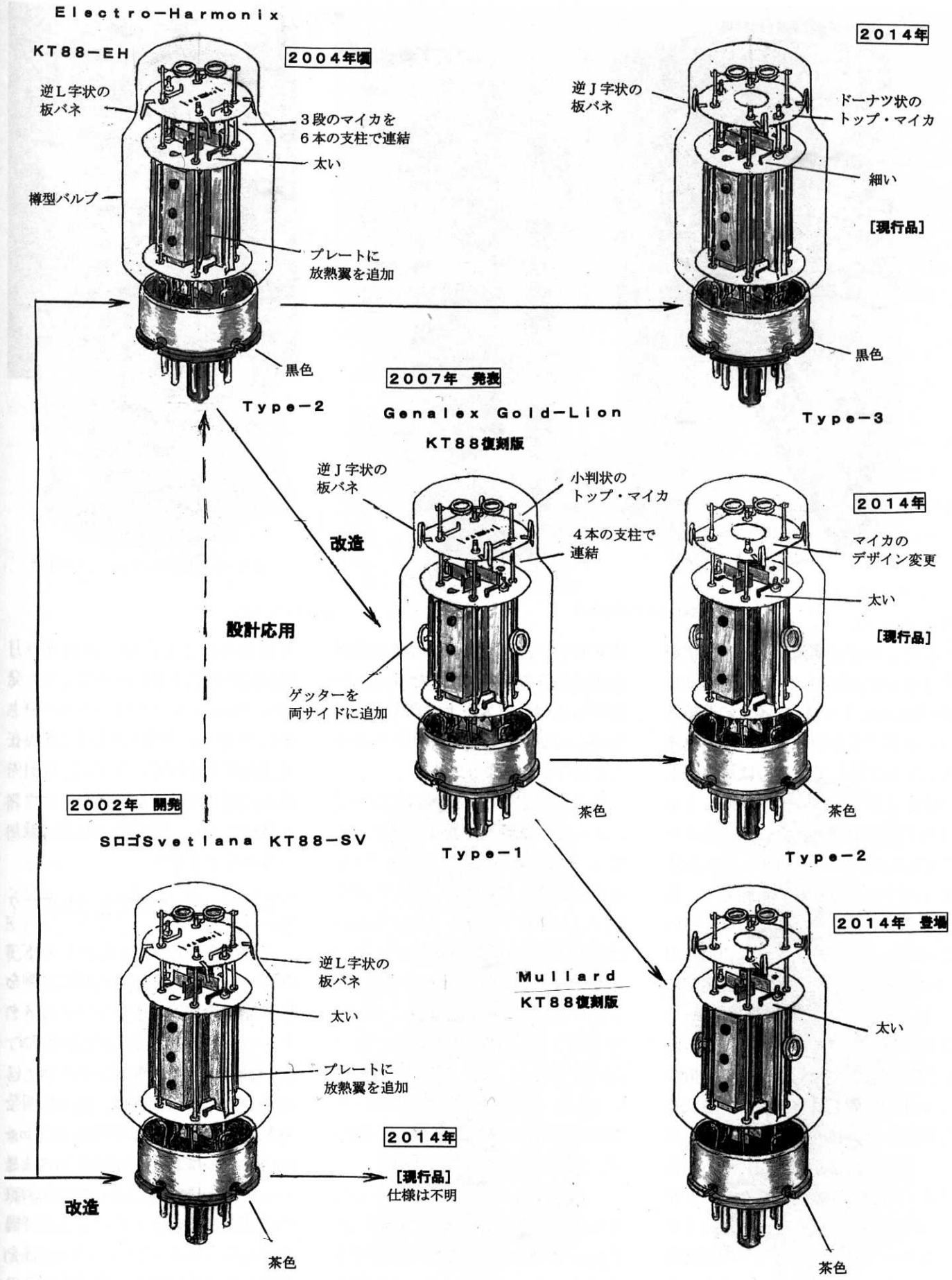
プレートには熱伝導性に優れた三重積層合金が採用され，カソード材料も改良されています．電極材料の工夫や基本設計はこのあと展開されるKT88系の全てに受け継がれています．

元種がSovtek-6550WEのため，電極のデザインやベース・シェルの材質がオリジナルKT88とは異なるのは仕方ないとしても，それ以外が気になります．KT88なのにST型バルブを採用したのは，シャシーにスプリングで固定された円環を管頂部に嵌めて固定する構造の脱落防止用リテナーがセットされたギター・アンプに対応するためと思われますが，偶然のいたずらか，1957年に短期間製造されたオリジナルKT88のType-2（先月号参照）に面影が似ているため，商品開発時にそのことを知っていてKT88と命名したのか知りたいところです．

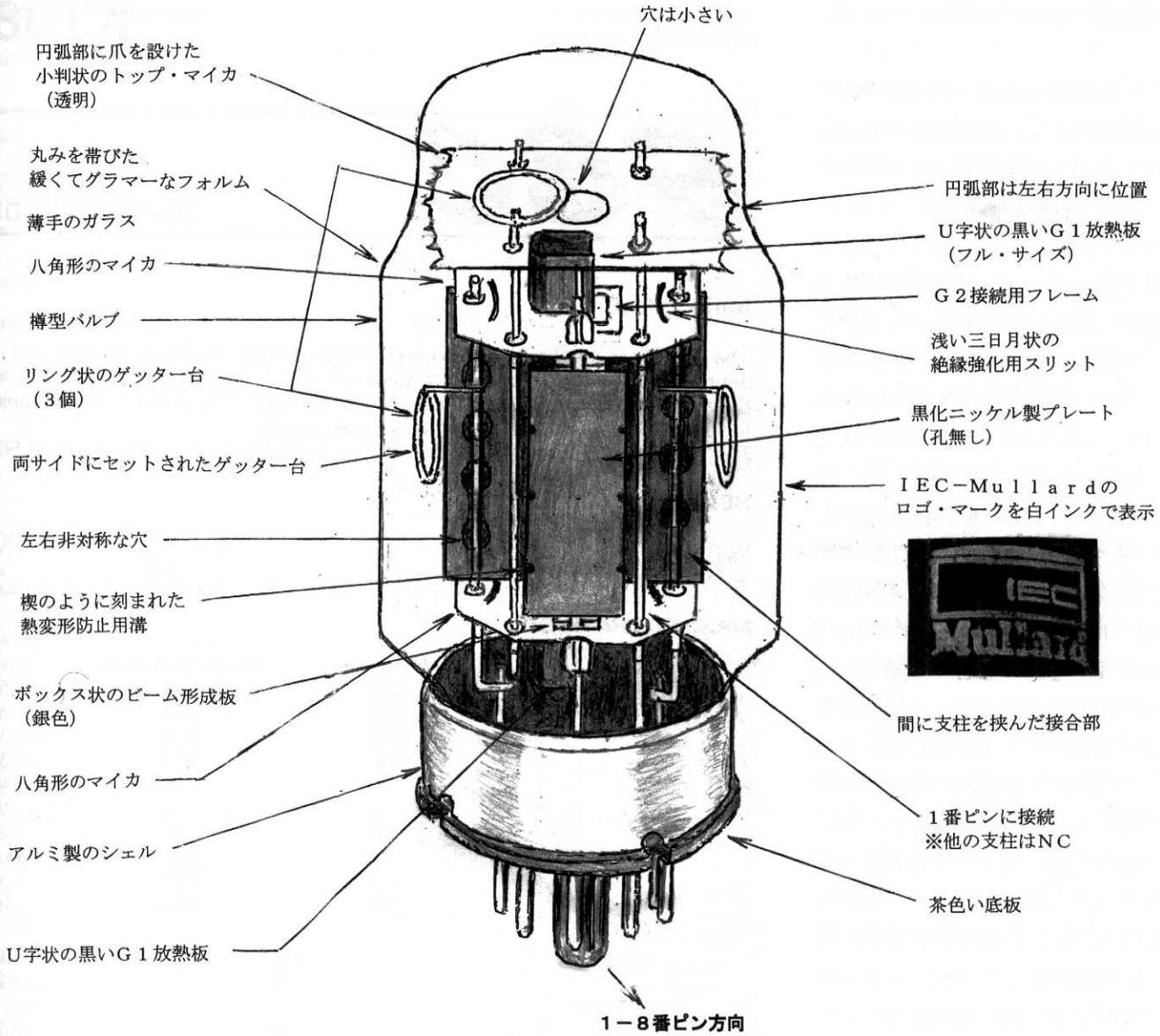
他方，電極は3段のマイカと複数の柱で支持されていますが，オリジ



◆ロシア：Reflector 工場製 KT88 系の変遷



◆ロシア：Reflector 工場製 KT88 系の変遷（続き）



★正体はＭ－Ｏ．ＶａｌｖｅＫＴ８８（１９６０年代製のＴｙｐｅ－４Ａ）

◆ Mullard-KT88（M－O.Valve 製）の構造的特徴

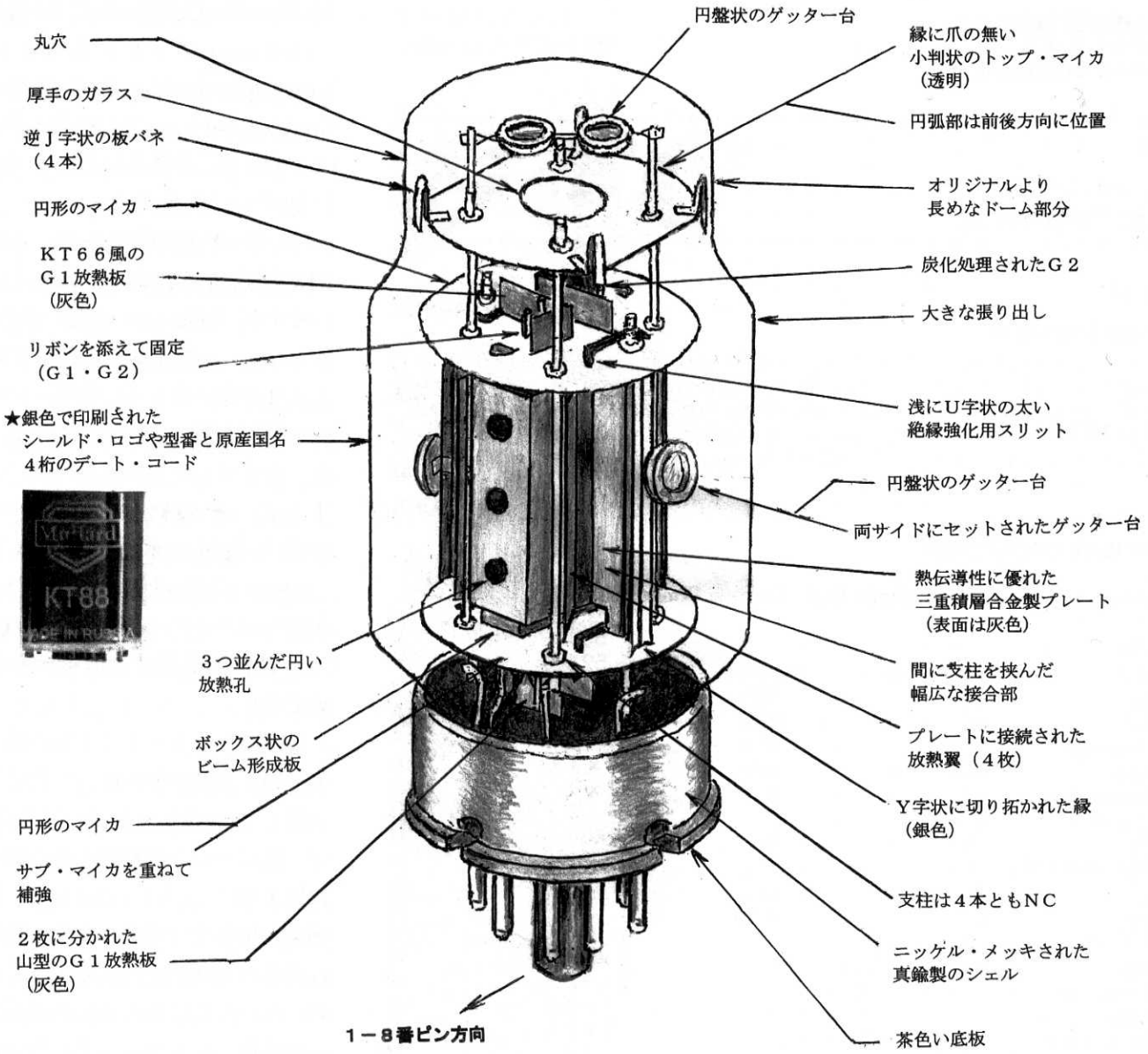
ルの存在を強く意識して設計されたように思われます．

特にSV-KT88で初めて採用された樽型バルブや，中部マイカと同形状のトップ・マイカにセットした板バネで電極を支持する手法は，KT88-EH以降に開発されたReflector工場製KT88系の全てに影響を与えています．

KT88-EHは2004年頃になってマイナー・チェンジされました．プレート接合部の両側には左右合計で4枚の放熱翼が放射状にセットされ，オーバー・ヒート時の耐久性が増しました（Type-2A）．プレートに接続された放熱翼は電極補強用支柱に近接しているため，組み立て精度の差による短絡や高電圧印加時に放電が心配になりますが，オリジナルKT88とは異なり，全ての支柱は電気的に浮いているので，使用上は問題ありません（オリジナルKT88は1番ピンを支柱に接続）．やがて数年後にゲッター台が新型の円盤状の2個型に切り替えられたType-2Bに進化しました．

続いて2014年1月製ではトップ・マイカはドーナツ状の新造品に変わり，縁に4本セットされた板バネは逆J字状になって向きが先代とは逆（上向き）になりました．さらに中部・下部マイカの穿孔パターンも変わり，極太だったプレート支柱固定部付近に刻まれた絶縁強化用スリットは細くなっていました（Type-3）．マイカの金型を変えた理由は不明ですが，後述するMU-KT88 RIの開発が影響しているようです．

Sovtek-KT88が製造中止になった今，KT88-EHはReflector工場製KT88系の基準モデルになりました．比較的安価ながら海外での音



★以外はＧｅｎａｌｅｘ Ｇｏｌｄ－Ｌｉｏｎ ＫＴ８８復刻版の現行品と同様

◆ロシア製 Mullard-KT88 復刻版の構造的特徴

われます.

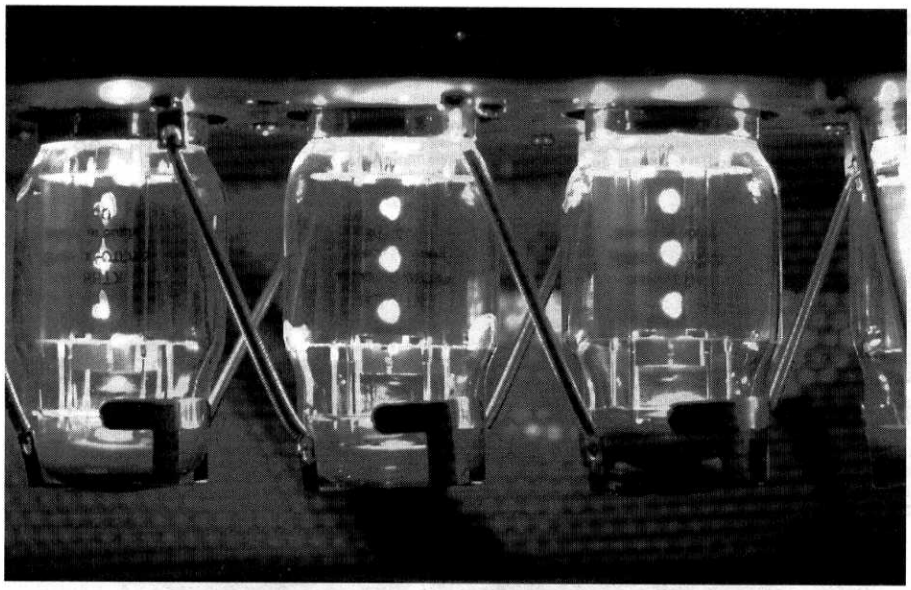
話は変わりますが，KT88-SV や GL-KT88 RI のベース底板が茶色なのは高級モデルの目印としての意味があるように思われます.

Sovtek-KT88 に始まり MU-KT88 RI に至るロシア製 KT88 系の変遷をまとめると一覧表のようになります.

ロシア製 Mullard-KT88 復刻版の構造的特徴

ロシア製 Mullard-KT88 復刻版（以下，MU-KT88 RI と言う）の化粧箱は，ヴィンテージ KT88 のものより一回り小さく，中型 ST 管用の白箱とほぼ同サイズです．ちなみに Reflector 工場製 KT88 系の化粧箱の寸法は1種類に統一されています．デザインはオリジナル Mullard が 1960 年代に使用していた民生用受信管の化粧箱を模していますが，ディティールは微妙に異なります．地色は青みの強い群青色で，ブランド名は“l”や“d”の書体が異なる他，その上下に書かれた文言から“A PRODUCT OF MULLARD LTD”が消えて“THE MASTER VALVE”のみです．また，蓋にはオリジナルには無いシールド・ロゴが表示されています．全体的には往年の元箱の雰囲気を高度に復刻しているように見えますが，先月号でお伝えしたとおり，Mullard 自体は KT88 を発売しておらず，正確に言うならば，発売元は米国の IEC なので，オリジナルの元箱には IEC のロゴ・マークが付いている点が異なります（写真参照）.

箱から取り出した球はオリジナル KT88 とはちょっと印象が異なります．バルブは樽型ですが，ドーム部



〈写真2〉Marshall Major 200W出力(KT88×4)

〈写真2〉Marshall Major 200W出力(KT88×4)

てしまいかねず，GL-KT88 RIは1970年代以降のオリジナルKT88に比べて非力と評価される可能性が大きいため，注意が必要です．

結論として，オリジナル規格表が確認できないため推測の域を出ませんが，MU-KT88 RIの主な特性はKT88-EHに近いとみてよさそうです．そして，そのことから想定されるオリジナルKT88よりもGmが2割弱低いことが音質面にどのような個性として表れるかに興味があります．

試聴結果

最も気になるMU-KT88 RIの音質は，手持ちの機器の関係で，自作の6V6GTシングル・アンプ（ECC88-SRPP+6V6GT）のグリッド・バイアス等を調整して確認することにしました．大型管のため整流管はGZ34とし，電圧増幅管と整流管の銘柄はともに英国Mullard製にしました．スピーカーは三菱のP-610DBをバスレフ箱に入れたものです．

今回，比較試聴用に用意したのは，ヴィンテージ管はオリジナルKT88の1979年製（Type-5A：Gold-Lion印）で，現代管はGL-KT88 RIの1点に絞りました．構造的に瓜二つな両者の音質的な違いを確認するのが狙いです．

まずリファレンスとして最初に試験したM－O.Valve製のオリジナルKT88（Type-5A）は，一聴して明るくクリアで瑞々しく，しっとり落ち着いていながらパワフルかつダイナミックな音です．低域は豊かで適度に締まっていて，高域は素直によく伸びており，中域は厚みがあります．芯はやや低域寄りながらバランスは良好．余韻は中庸ですが響きは豊かで，ハーモニックが綺麗なのが印象的です．艶やかでリッチなサウンドは，クリーミィでコクがあってなめらかですが，ワイド・レンジさや，高域のヌケの良さを失わずに音楽の微妙なタッチを表情豊かに伝えるところはさすがです．キレがあって，重たさや籠りは感じられません．血が通っているような温かみやリアルさも感じられて，表現力はとても高く，銘球として人気が非常に高いのもよくわかります．

他方，現代管のGL-KT88 RIは，明るくクリアで瑞々しく，解像度が高くてダイナミックさやワイド・レンジさが際立っています．適度にクリーミィでコクがあってリッチですが，どちらかと言うと少しかっちりとした現代的なサウンドです．けれどもロシア球にありがちな寒色系の音色ではありません．やや硬さが感じられるものの，エージングが進めばこなれるかもしれません．低域は豊かで適度によく締まっており，高域はすっとよく伸びていて，芯は中域にあります．各帯域の繋がりはなめらかでバランスは良好．響きや余

められるだけの性能や音質を持った球であることをPRしており，MU-KT88 RIの開発の意図がギター・アンプ向けにあることが窺えます．

まとめ

2014年春に発表されたロシア製のMU-KT88 RIは，往年のMullard印KT88（正体はM－O.Valve製のオリジナルKT88）の復刻版と言うにはちょっとルックスが異なります．ゲッターが管頂部と両サイドの3ヵ所に飛ばされていて，ベースの底板が茶色で，トップ・マイカは小判状，3段のマイカを連結する支柱が4本であることはオリジナルType-4A同様ですが，プレートには放熱孔が開いていて放熱翼がセットされており色や形状も異なる他，逆J字状の板バネ4本で電極を支持していて，G1放熱板の形状や枚数，ベース・シェルの材質などが異なります．その姿は2007年に発表されたGL-KT88 RIの現行品（Type-2）にそっくりで，マーキングが無ければ両者の見分けは非常に困難です．

オリジナル規格表が公表されていないため，電気的特性は推測にならざるを得ません．構造的によく似たKT88-EHの規格表を見ると，オリジナルKT88と耐圧やプレート損失は同等ですが，G2損失は9.1%多く許容しており，Gmは17.4%低く，G1回路の最大抵抗値は自己バイアス時に同等であるにもかかわらず固定バイアス時は安全度を高くとっての措置によるものか約半分に抑えられています．また，内部抵抗値は記載されていませんが，恐らく1割強高いように思われます．

なお，MU-KT88 RIの比較の対象としてはGL-KT88 RIのほうがふさわしいのですが，発売元が公表している規格表は往年の規格表を部分的に編集して転載したのも同然で，同じロシア製でかつ構造的に酷似していながら同モデルだけがEp-maxが200Vも低い（600V）のは不自然なため，あてにはなりません．

結論として，オリジナル規格表が確認できないため推測の域を出ませんが，MU-KT88 RIの主な特性はKT88-EHに近いと思われ，かつオリジナルKT88とは微妙に異なることは確実です．

肝心の音質は，基本的な音の傾向はGL-KT88 RIと同様ですが，表現力にさらに磨きがかかって一皮剥けたような印象で，リッチで華麗なサウンドです．どちらかと言うと現代的ですが，オリジナルとの差はぐっと縮まっています．GL-KT88 RIと構造的に瓜二つにもかかわらずこのような違いが感じられるのが不思議でなりませんが，明らかにサウンド・キャラクターは異なります．そのため，製造ラインは同じであっても「Mullardマジック」と呼ばれる独自のレシピに基づくエージング・プロセスを施している可能性が考えられます．いずれにしても単なるマーキングの付け替えではなく，外観からはわからない何らかの工夫が施されているのは確実と思われます．

発売元のホームページでは「Marshall製ギター・アンプの代替管として最適」と紹介されているため，意図された主な用途は電子楽器のようですが，オーディオ用としても十二分に満足できるレベルを有していることが確認できました．GL-KT88 RI同様にReflector工場製KT88系の最高級モデルだと思います．

最も気になる入手方法ですが，相手国側の商標権の関係で，発売元が直接出荷できる国や地域が限られているため，我が国では並行輸入品を探すことになりますが，残念ながら12月下旬現在，国内での取り扱いはまだ確認できません．恐らく業者の大半は様子見といったところでしょうが，複数で取扱いが確認できるEL34復刻版同様に一日も早く輸入してもらいたいと願っています．

今現在，国内での取り扱い業者がいないとなると，あとは海外の商社から個人輸入するしかありません．私はカナダのThe tube store.comからネット通販で取り寄せました．価格は1本45.95ドルで，発売元よりも割安でした．

★次号予告

次回もロシア製Mullardブランド新型管紹介シリーズとなりますが，今度は6L6GC復刻版（MU-6L6GC RI）をご紹介したいと思います．

MU-6L6GC RIはロシア製Mullardブランド球の第4弾として発表された4種（CV4004／12AX7，KT88，6L6GC，6V6）のうちのひとつで，欧米では7月頃に発売されました．

ところで，Mullardブランドの6L6GCなんてヴィンテージ球に存在するのか疑わしいと思っている方は多いのではないかと思いますが，実在します（証拠写真は次号に掲載します）．問題は製造元で，それがMullardなのか，Philips系の他社なのか，それとも全く関係の無いメーカーなのかです．構造を手掛かりに調べたところ意外なメーカーの製品でした．

他方，ロシア：Reflector工場製の6L6GCには多数のバリエーションがありますが，それらとMU-6L6GC RIの違いが気になるところです．

次回はオリジナルMullard印6L6GCの正体を明らかにするとともに，ロシア製復刻版の概要を入手したサンプルの観察結果をもとにお伝えしたいと思います．